

## 2. 委員名簿

所属・役職	氏名(敬称略)
(委員長) 高知大学 人文学部 社会経済学科・総合地域政策学 教授	うえだ けんさく 上田 健作
【安芸市】陽和工房株式会社 代表	にしむら しげる 西邨 滋
【安芸市】東川公民館 館長	こまつ つぎお 小松 次男
【大方町】特定非営利活動法人NPO砂浜美術館 事務局員	つづき ひさよ 都築 久代
【大方町】有限会社海工房 取締役社長	にしくま たかのり 西隈 隆則
【西土佐村】社団法人西土佐環境・文化センター 四万十楽舎事務局長	おおたか たつと 大高 達人
【西土佐村】西土佐村雇用機会増大促進協議会 職員	おくの ようすけ 奥野 要助
【夜須町】NPO 法人 YASU 海の駅クラブ	あき せいいち 安芸 誠一
【夜須町】YASU の応援団元気わくワク 書記	ながの ながゆき 長野 長幸
四国旅客鉄道 高知企画部長	まつき ひろゆき 松木 裕之
土佐くろしお鉄道 常務取締役	あおき いくお 青木 郁夫
土佐電トラベルサービス 取締役営業統轄部長	はまぐち ただし 濱口 正
国土交通省国土計画局地方計画課 地方計画調整官	しらishi ひでとし 白石 秀俊
国土交通省総合政策局 観光地域振興課 課長補佐	むらかみ まさみ 村上 雅巳
総務省自治行政局地域振興課 課長補佐・過疎対策室	さとう のりあき 佐藤 紀明
農林水産省農村振興局 地域振興課グリーン・ツーリズム推進室グリーン・ツーリズム推進班長	まつむら ひろいち 松村 廣一
四国運輸局企画振興部 交通・観光計画調整官	たけだ のりお 竹田 規央
四国運輸局 高知運輸支局長	うえだ よしゆき 上枝 義幸
中国四国農政局 農村計画部農村振興課長	まつお ふみひろ 松尾 史弘
高知県 商工労働部 観光振興課長	みぞぶち あつし 溝渕 篤
高知県安芸市 農林課長	おだに けんいち 小谷 健一
高知県大方町 まちづくり課長	にのみや しげのり 二宮 重則
高知県夜須町 企画課長	うえだ ひでひろ 上田 英博
高知県西土佐村 総務課長	おかばやし たけのり 岡林 武範

### 事務局

四国運輸局 企画振興部観光振興課 課長	にしもと てるふみ 西本 照文
四国運輸局 企画振興部観光振興課 課長補佐	おか たかのり 岡 孝憲
四国運輸局 企画振興部観光振興課 係長	しげもと きんじ 重本 錦二

### 3. 委員会議事録

#### 第1回 四国ボランティアホリデー検討委員会 議事概要

日時： 平成16年11月4日（木） 13:30～15:30

会場： 南国オフィスパークセンター 2階会議室

議題： (1) 本事業の概要について  
(2) ニーズ調査の状況について  
(3) モデル事業の概要について  
(4) その他

#### 議事内容

(主催者あいさつ)

(委員会委員長選任)

(委員長あいさつ)

#### 【議題1】本事業の概要について

(説明) 事務局より事業の概要とスケジュールについて説明

(質問) 作業部会の開催は市町村内なのか、合同なのか、またコーディネーターの関係はどうなっているのか。

(回答) 作業部会には今年度のモデル事業を受け入れるためのということと、次年度以降のボランティアホリデーを促進するためのという2つの目的がある。モデル事業の推進については主に各市町村内で、具体的なプログラムづくりをしていただきたい。モデル事業終了後については各市町村内開催に加えて合同（安芸+夜須、大方+西土佐に分けた開催を予定）で今後のプログラムの拡充や受け入れ体制の整備、受け入れルールづくりについて、話し合ってもらいたい。コーディネーターは各市町村内で、モニターと受け入れ側の間に立つ世話役という意味で、各市町村作業部会から一人出してもらいたい。

(質問) 定住といっても長く暮らすにはお金がかかる、というが、ボランティアホリデーで来てもお金はかかるのでは。

(回答) 普通に観光してホテルに泊まって、ということであれば確かに費用はかかる。それを、ボランティアをして長期滞在をするということで、宿泊費用を公的な施設や民泊等で軽減していくということを、この事業の中で検討していきたいということである。

(質問) それで、地域の雇用を奪わない、民業を圧迫しないと説明している意味なのか。

(回答) 雇用を奪わないとは、無償のボランティアであるために現在地域の人が雇用されている、その立場を奪うことにはならないという意味である。

(質問) 有償のボランティアは行わないのか。

(回答) 今年度のモデル事業はあくまで無償であるが、将来的には有償のものも検討することはありうる。無償であるために無責任になるという懸念については、コーディネーターの活用によって解決していきたい。

## 【議題2】ニーズ調査の状況について

(説明) 事務局よりニーズ調査の進行状況について説明

(質問) ニーズ調査の報告のタイミングはいつになるのか。モデル事業はそれを待たず準備せざるを得ないが。

(回答) ニーズ調査単体の報告は12月上旬となる。モデル事業の実施方法への反映は難しいため、モデル事業の分析に活かしたい。

(質問) 次年度に活かすという話が先ほどからあるが、この事業は次年度はどうなるのか、次年度も引き続きこの委員会で検討するのか、各市町村で独自にやってほしいということなのか。

(回答) 本事業としては単年度であるが、来年度以降も情報交換の場を持つ等ができれば良いと思っている。

## 【議題3】モデル事業の概要について

(説明) 事務局よりモデル事業の計画と準備の進行状況について説明

(質問) モニターのボランティア保険についてはどうするのか

(回答) 申し込み窓口を紹介し、モニター本人費用負担で加入していただく。参加にあたっては加入を必須とする。

(質問) そういう、個人負担の費用もある中で、応募する人はいるものなのか

(意見) 新潟の地震のボランティアを見ても、シニアもだが若い人がたくさん参加しており、ボランティア参加意欲は高まっていると思われる。周囲にも個人的に話してみたが、反応する人は多い。

(回答) 募集にはかなり反応していただいている。当初シニア中心を想定していたが、実際には20～30才代の、二番目に大きいターゲットとしていた層が多い。ただ、体力という面から見ると、若い方は若い方で、受け入れ先には喜んでいただけるかもしれない。ただ、本格事業実施にあたっては培ったスキルを活かしたい、元気なシニアにどうやって告知していくか、告知の媒体等をさらに検討する必要があると思われる。

(質問) モデル事業は、飛行機代が無料だから来る人や時間はあるがお金のない人なのではないか？

(質問) その点は、まず今年度のモニター選定にあたってそのような人が入らないよう十分に留意したい。また、事業本格実施にあたっては、交通費は本人負担となるのだが、ボランティア意欲の高まりを踏まえたものであり、先ほどの新潟地震の例にしても、誰かの役に立つことに喜びを感じる人は多くいると考えており、それゆえに実施する事業である。

(質問) 作業部会でボランティアメニューが決まってもモニターによって向き不向きがあるのではないかと、また1日数時間で果たして地域の人と交流はできるものか。メニューは1日のうちにボランティアと観光が交じるなど変更したり選択したりできるのか。

(回答) 応募していただいた人との組み合わせになる。モニターを絞っていくのとメニューを決めていくのを同時進行でやっていきたい。今年度はモデル事業なのでイメージしたとおりのプロフィールのモニターでなかったり、体力の有無でマッチングが必ずしもスムーズでなかったりということもあるかもしれないが、来年度以降に役立てていければと思っている。

(質問) モニターとボランティアメニューのマッチングはどうするのか？

(回答) モニターの最終絞込みとメニューの絞込みをすり合わせて決定したい。

(意見) 今の若い人は自分の自己実現のためになる機会と思えば自己負担でも来てくれる。そのためのしかけをしなくてはならない。

- (意見) 大方町では数年前より砂浜美術館のTシャツアート展のボランティアを全国から募っている。8名のボランティア募集に対して20名以上の応募があり、特に20～30歳代の女性の応募が多い。交通費も宿泊費も個人負担で、お弁当だけこちらでみているが、廃校を利用した施設に泊り込みで、作業がめざしている姿を自分でイメージし、自ら何が必要か考えて動いてくれる人が多い。最初と最後の交流会を含めた地元の人との交流や、滞在の世話をしてくれる人との交流も大きな意味あいとなっているようだ。他にも、町が持っている資源に対してボランティアが来てくれたらと思っていたので、今回はよい機会だと思っている。
- (意見) 高知県でニーズの強い森林ボランティア等は、今後本格事業の中で、有償ボランティアや民泊によって個人に宿泊費負担をかけないものとして検討していくとよいのではないか
- (質問) ボランティア先の自治体の特徴について、応募者はどんなところかわかって応募しているのか
- (回答) 各自治体の地図を示しているが、受け入れ内容や自治体の概要までは掲載していない。まず入口としてシンプルな情報で関心を持ってもらうことをねらった。またチラシの場合情報量が多すぎると見てもらえない。
- (意見) その意味では、今回のモニターにも、ぜひ地元の方と、地元の食材等を味わいつつ交流を深めてほしい。
- (質問) ボランティア内容と言っても夏にはたくさんあるが冬にはない自治体、あるいはその逆などあるのではないか
- (他自治体の委員より回答)
- 必ずしも季節によらないものもある。うちの自治体では最終的には来る人が決まってから最終的にはつめようということになり、相手を選ぶものから比較的誰でも対応できそうなメニューまで考えた。森林ボランティアはかなり肉体的に負担が高いのではないか。現在ボランティアメニューとして考えているのはもっと身近なもので、あと少し余裕があればできるのに、というようなことを手伝ってもらえるもの、という範囲で探している。ただし、日替わりでなくじっくり1つのことをやってもらおうと思っている。もちろん、モニターとマッチしなければ変える用意はある。
- (意見) 農作業以外にも、例えばホエールウォッチングをやっている、しゃべりがうまい船長ばかりではない。そういう時に、たとえばインターネットで、事前にeラーニングで講習を受けたりして、現場で船に同乗してボランティアガイドをしてらえたりするとよいのでは。
- (意見) 冬期の誘客は以前から課題とされている。モデル事業を機に、またアンケート調査も見て、何を提供できるか、再度検討したい。観光のお客様なのか、協力者なのか、ある意味、ふるさとというふうに思ってもらいたいという第二目標もあるし、まずは来ていただく、そして広い意味の観光客なり協力者という形でパートナーシップをとらないと、一過性のボランティアに終わり、地域の活性化につながらない。地域の側も地域で必要とされるボランティアのイメージを持っていないと。Tシャツアート展にはそれがボランティアに理解されるから、無償でもたくさんの方が応募して下さるのでは。
- (意見) とても奥の深い事業だと思うのだが、主な目的は貢献よりも交流による活性化にある、そのため手段としてのボランティアだと思っている。四万十楽舎では廃校舎を利用して宿泊施設にしており、夏は多くの人があるし、ボランティアもたくさん来る。このボランティアは1日4時間くらい働いて3000円くらい保証し、食事を出すのが旅費は個人負担。このような条件でもボランティアは来る。その時に来年も来たいと思うのは、地域との接点があってこそ、交流

があつてこそだと思われているのだと感じる。

(意見) 安芸市でも昨年からワーキングホリデーに近い形で若干日当つきだが、高知大学の学生が来ている。そこでもやはり作業を通じて地域の方と交流することが楽しいということで、今年も同じ人が参加している。

(意見) 地域の高齢者だけではなかなか新しいことを始めようとしにくい。でも誰かがはじめて小さくてもビジネスになったりするとみな関心を持つ。最初始める時に若い人や外からの力がぜひほしい。ビジネスに、といつても大きなお金でなくちょっとしたお金になるということで充分であり、それで多くの高齢者が関わってくるし生きがいにもなる。シニアにも夢と希望を持ってもらえるし、まちづくりにも効果がある取り組みではないか。地方分権して地方が自主自立していこうという時だということも、ボランティアの役割が大きくなっている要因だと思うし、観光そのものが地域ふれあい型になってきていると感じる。

(意見) ボランティアをする側という意味でも、シニアが注目されると思う。リタイアされた方をどう受け入れるかをこの委員会で考えたい。ボランティアイコール力仕事というのではなく、シニアの受け入れにも工夫をこらしたい。

(意見) この事業は後半でボランティアのニーズと受け入れのマッチングを図るポータルサイトをつくる。ここで地域づくりを手伝ってほしいというメッセージを出していくことが必要である。

(意見) 観光の仕事を長くやっているが、今の観光は物見遊山ではない、地元との交流を楽しむことに興味を持つ人が増えている。ぜひ期間内に地元の人と、作業の中だけでなく地元の味を楽しみながら交流の場を持ったり、地元のイベントに参加してもらったり、というようなことをしていただくと、文字どおり第二のふるさとづくりやリピートにつながると思う。また、この事業の後半にポータルサイトの構築をすることになっている。若年層はもちろん、観光やボランティアに関する情報をインターネットで収集しているが、シニアにとってリタイア後一番やりたいことはパソコンという声があったり、実際には大変詳しくなっている方も多い。

ポータルサイトでは都会の人のニーズと受け入れる自治体の「こういうボランティアです」「こういう人にきてほしい」ということをビジュアルで見えるような形にし、その中に、地域づくりを手伝ってほしいというメッセージを入れてしっかり発信する。そうすれば、若い人を含め地域の役に立ちたいという人は多いので、そういう人のアンテナに引っかかっているのではないかな。

(意見) 今のボランティアは奉仕というより自己実現につながるボランティアには関心が集まっている。若い人は価値があると思うものにはすごく投資するし、お金がかかっても、どこまででも自分で行くし無償でも働く。それは高知大学の学生も見ていて実感している。現代人は「価値がある」というしかけを用意すると、そこへお金を自ら投資して無償でも活動するニーズがある。地域をみんなでよくするしかけをつくる、その手伝いをしませんかという打ち出し方をしたい。

(委員長)

モデル事業の精査については事務局と委員長にご一任願願したい。またモデル事業実施にあたっては委員及び自治体の方々にどうぞご協力願いたい。

#### 【議題4】その他

(告知) 次回委員会日程についてお知らせ

以上

## 第2回 四国ボランティアホリデー検討委員会 議事概要

日時： 平成17年1月27日（木） 13:30～15:30  
会場： 高知市文化プラザかるぼーと 9階特別学習室  
議題： (1) ニーズ調査とモデル事業について  
(2) ポータルサイトの構築と今後の取り組みについて  
(3) その他

### 議事内容

(主催者あいさつ)

(配布資料一覧により資料確認)

### 【議題1】ニーズ調査とモデル事業について

(説明)「ニーズ調査とモデル事業について」説明

(意見・モデル事業でボランティアを受け入れて)

2名の男性とも非常に関心が高かった。ボランティアは受け入れ側と参加する人、お互いの切実性が合致していないと成立しにくい。都会でできない体験に関心があるので、そこをギブアンドテイクできるかがこれからの課題になる。制度をつくるのであれば、最初からある程度ここをしっかりと決めておくべき。

(意見・モデル事業でボランティアを受け入れて)

行政職員であるが、特にコーディネートする人間として行政は役に立たないということがよくわかり、今回四万十楽舎にコーディネートしてもらってよかった。受け入れ側から「こういったことのボランティアがほしい」という声が出るようなしくみをつくっていかれたらと思う。イベントのボランティアでその地域を気に入ってもらい、長いお付き合いになるようであればよいと思う。

(意見・モデル事業でボランティアを受け入れて)

どこまでモニターにやらせていいのか加減がわからず戸惑った。モニターの一人は大学でまちづくりや観光について学んでおり、夜須の観光の特色をどう出していくと都会の方が来てもらえるのかという意見をいただいた。今後はボランティア事業を通じて、夜須町自体も地域の情報を積極的に出していかなければいけないと思う。思った以上に参加者にとっての地域の情報が少なく、整理されていないと感じさせられた。これは行政の責任であり、解決できる整備をしていきたい。

(意見・モデル事業でボランティアを受け入れて)

町があと3年もつか4年もつかという危機感でまちおこしをやっていく時、ボランティアは非常に重要。いろいろな取り組みメニューができると考えている。

(意見・モデル事業でボランティアを受け入れて)

大方町で塩づくりをしているが、少し特殊な塩なので、以前から生協の見学や学校の体験学習を受け入れており、ボランティアの受け入れに関してはまったく支障なかった。モデル事業ということで、判断材料に役立てばと男性2人を受け入れたが、1週間ずっと塩づくりではなく、モデル事業としていろいろなメニューを試したのでボランティアというより体験という形になった。毎年ある作業ならば継続して来ていただき、次のボランティアの方への指導も兼ねる

ようなしくみができるとうい。ボランティアに来てほしい時期は、受け入れ側も繁忙期で、指導や説明の手間を短くしたいということもあると思う。今回のモデル事業だけでは、まだわかりにくいと思った。

(意見・モデル事業でボランティアを受け入れて)

大方町は田舎で高齢化がかなり進んでいる。農業を含め一次産業中心だが後継者不足等で耕作放棄されている。都会からボランティアの方においでいただき、人手が欲しいという時に受け入れれば町の活性化に大いに役立つと思う。

(意見・モデル事業でボランティアを受け入れて)

従前から受け入れ側が弁当代等を負担する有償ボランティアや交流事業、援農体験に慣れており、今回も受け入れ自体は非常にスムーズにできた。反省点としては、対価を払えば従業員同様厳しく作業レベルも求めることができるわけだが、ボランティアなのでどの辺のレベルのことを求めたらいいのかということが、皆それぞればらつきがあったという反省点がある。また、モニターに無理をして過大なサービス、おもてなしをした部分があるのも率直な反省である。無理のないつき合い方ができ、平準化した受け入れ態勢をとることが、これから末永く継続して事業化できる前提条件になると思う。

(意見) 観光は団体から個人旅行にシフトし、ニーズも多様化している。単なる観光旅行でなく地元の人と交流したいというニーズが、都市部の住民に高まっている背景があり、ボランティアホリデーという構想が出てきている。各地域が求めているボランティアメニューのニーズをしっかり示して、受け入れ側とボランティア側の責任の線をきちんと引くことが長続きには必要。そのためのモニター調査なので、今後整理をしていけばうまくいくのではないかと。

(意見) 中四国管内の8割弱の市町村が中山間地域。都市と農村の交流を通じて地域の活性化を図るため、ここ5、6年、グリーンツーリズムや農林漁業における滞在型活動を推進すべく、特に関西、岡山、広島、愛媛の大三島などにも滞在型市民農園も整備されている。安らぎたい、いやされたい、農村長期滞在で体験してみたいという都市部のニーズがある現在、どういう資源があるのか、受け入れ側の市町村の情報、受け入れ側の対応や利便性、また行ってみたいくなる情報をきちんと発信していく対応が今後必要である。

(意見・交通費の優遇措置について交通事業者側委員より)

移動費を安くしたいのは誰もが持つニーズだが、早くて快適な移動手段であれば高くついてしまうのはやむを得ない。しかし、多少でも時間に余裕があれば航空会社でもJRでも、青春18きっぷなど安い切符や割引はいろいろ設定されている。ボランティアする人に対して各種の割引切符情報の紹介などの方が、交通事業者側としてもまずは取り組みやすい。

また、単純な割引をすぐにとというのは難しいが、受け入れ側の施設とタイアップして旅行商品として設定すれば、やりやすくなるのではないかと。

(意見・交通費の優遇措置について交通事業者側委員より)

東京を起点に飛行機で高知に来るJALの四国フリーパス券は3～5日用だが、2日間の設定も計画している。東京からは飛行機で高知来ることが多いだろうが、ボランティアで来ていただけるのであればJR四国内のある程度の割引は前向きに考えたい。特急が岡山から乗り入れておりJR西日本の了解も必要であるが、前向きに考えたい。

(意見) この取り組みは、交流を大事にすることで相互理解が深まり、人が訪れる地域が元気になるということである。その交流方法としてのボランティア活動というのは、1つの試み、切り口だ

と思う。交通機関利用者のうち住民が飛躍的に増加するのは非現実的。地域の足として機能していくためにもたくさんの方に来ていただき、交流を深めてもらうことが交通事業者にとってもボランティアホリデー事業の上からも大切である。

ボランティアは、人の役に立ったということが実感できて幸せや喜びを感じるものであるが、交通についてもアクセス手段としてだけではなく、地域の足として役立っていくために交流を積極的に促進していくという面もある。ボランティアやボランティアホリデーの定義もこの委員会の中で再度共通認識を持つべく議論し、試みと結論を蓄積して類型化する作業の必要がある。

## 【議題2】ポータルサイトの構築と今後の取り組みについて

(説明) 事務局より「ポータルサイトの構築と今後の取り組みについて」

(質問) 17年度には具体的にこの中のどれを実施し、最終的な「準事業化」まで何年ぐらいかかることを目標にしているのか。

(回答) 17年度については今年度と同じく創発費事業として国の支援を得られるように鋭意努力している途中であるが、18年度から完全に自主独立という形にできるよう17年度中にそのしくみをつくりたい。具体的な内容がある程度見えてくる次回委員会の際にはご紹介したい。

(意見) 来年度ももう少し創発費調査の支援が受けられるよう努力をしたい。今年度事業が地元のマスコミなどにも取り上げられ、他の自治体から参加希望も来ている。ボランティアホリデーを「交流人口の増大」の1つの施策と位置づけ、その地域の柱にしたい。ニーズもあるのだからボランティアメニューの種類も増やし、地域も広げればいっそう事業が拡大していく。来年度以降はやる気のある地域は大いに参加してもらうような形で広げていければと考える。

(質問) 18年度以降の自主独立というのは具体的にはどういう意味か

(回答) まだ案であるが、ボランティア休暇を制度化している企業、社会貢献推進室においてボランティア活動に取り組む企業もある。このような企業と受け入れ地域がポータルサイトを介して1つのしくみで回る形をとっていききたい。これを来年中に実行することができたら、そこをコンソーシアムのような形としたい。毎年必ず企業から一定の人数が送客される形を基本としながら、個別の参加者に対応するという形になれば事業として回っていくと考えている。

(質問) ポータルサイトの運営は国交省がやるのか。

(回答) ポータルサイトはこの事業の来年継続の有無にかかわらず1年間は富士通総研で運営させていただく。事業として継続できた場合、さらに運営主体をつくりそちらに渡すことを考えている。継続しなかった場合にはまた別の方法を考えたい。

(質問) 国としては、この件についてどのように考えているのか。

(回答) この取り組みは、試みとして非常に新しい切り口であり、皆様のご意見を伺いながら課題を1つ1つ整理して類型化できていけばいろいろなしくみができる。ポータルサイトもITを活用した新しいしくみであり、有用であると考え。必要に応じて、皆さん方のご要望やニーズに応じた対応は十分していきたい。

(意見) ボランティアホリデー同様、地域のコーディネーターの育成が観光面でも非常に重要な要素である。体験型の観光の推進に取り組んでいるが一番のネックは地域ごとにコーディネーターをどう育成していくかである。

(意見・交通費の優遇措置について交通事業者側委員より)

旅行業には交通や宿泊施設などいろいろ要素があるが、こういった検討を続けていく中で私たちも吸収させていただき、また皆さんに利用していただける機会があったら大いに協力をさせていただきたい。

(意見・委員長より)

本日議論された課題を踏まえて最終報告書案を作成する。「交流人口拡大」という大目的に向けて企画されたボランティアホリデーであり、モデル事業とニーズ調査でボランティアホリデーの効果をどう検証し、モデルを提起するかが1つのポイントであり、さらに発展させるための課題も明らかにする。次回委員会において、報告書案をもとに充分議論し、よい報告書となるようにしたい。

以 上

### 【議題3】 その他

(事務局) 第3回委員会の日時案内、及び4自治体のコーディネーター合同の会議について連絡

### 第3回 四国ボランティアホリデー検討委員会 議事概要

日時： 平成17年2月24日 (木) 13:30~15:30

場所： 高知市 高知電気ビル 804号会議室

議題： (1) ボランティアホリデーポータルサイトとパンフレットについて  
(2) 報告書案について  
(3) 平成17年度ボランティアホリデーについて

#### 議事内容

(主催者あいさつ)

(配布資料一覧により資料確認)

#### 【議題1】 ボランティアホリデーポータルサイトとパンフレットについて

(説明) 「ボランティアホリデーポータルサイトとパンフレットについて」説明

(質問) サイトの利用は無料か。

(回答) 無料である。

(質問) ボランティアをするにあたり利用者が一番気になるのが予算であると思われるがポータルサイトの中に予算の表示はない。

(回答) 宿泊施設に関しては大体の予算が出せ、交通情報に関しては参考資料として出す。自分で計算しこのサイトの中で予算ができるということはないが、役に立つ情報は全部リンクさせる。

(質問) ボランティアホリデー自体が新しい取り組みであり、初めて見た人にとって、実際に自分が行きたいと思った地域がイメージできなくてはならない。トップページの「体験談」についてはどう考えているのか。

(回答) まず平成16年度モデル事業参加モニターの感想等を編集し、体験談とする。その後は実際に行った方から投稿してもらう。

(質問) 評価についてはどうか。

(回答) ボランティアホリデーというワードが定着し、このサイト自体で利用者がどんどん広がるよう

- になれば、評価を進めることも考えられるが、今の段階では各地域によって活動内容の違いがあり過ぎ、評価には早すぎる。
- (質問) 当面のボランティアの受け入れ窓口と自治体への委譲についてはどうか。
- (回答) 各地域の作業部会でコーディネーターを窓口にするという意見もでたが、実際ボランティア内容の詳細を理解しているわけではないので、最初の段階では自治体で受け、利用者に対してもフィルターをかけながら進めた方がよい。4月のオープンに向け調整したい。
- (質問) まだ相談の余地があるか。
- (回答) 他の3カ所の委員会が終了した時点で最終的に決定するが、前例として自治体が受けるかどうかによって今後の流れが変わるので、ご意見があればこの場でいただきたい。
- (意見) 当面は自治体で行い、将来的にはNPO等に任せたいが、経費をどう捻出するのか、他の自治体の意見をききたい。立ち上がりの部分について、自治体で担うということに異議はない。
- (意見) 地域の取り組みにも格差があるため、最初のバックアップとコーディネーターを自治体が行い、それを地域のコーディネーターに受け継ぐという形が望ましい。
- (意見) 当初は行政側が窓口、もしくは各地区のコーディネーターに紹介する仕組みであれば、携わることが可能。
- (質問) パンフレットのデザインと内容について、また納品はいつか。
- (回答) 3月下旬から4月上旬。
- (質問) 意見をいただく時間があるか。
- (回答) ファックス送信票にコメントを書いて送っていただきたい。
- (質問) ポータルサイト新規団体に登録する場合の利用規約認定は、パンフレットの応募条件を指すのか。また、4モデル地域外の自治体がボランティアを受け入れたい場合ここから参加ができるのか。
- (回答) 規約についてはボランティアを受け入れる団体のルール、決め事等で、このホームページの利用規約である。新しい団体の新規の登録は、今回のモデル事業に参加した自治体で、新規のNPOや農家の方等のボランティア情報を出していくということが前提である。新しい自治体については、基本的に自治体の窓口を通した形で申し込み、自治体単位でボランティアホリデー事業に加わってもらう。
- (質問) 利用規約はつくるのか。
- (回答) 別のページでつくる。
- (質問) 他の地域の自治体等が参加したい場合は、事務局に相談するのか。
- (回答) 今現在は確定していないが、将来的には各自自治体で新しくホームページを作る形に持っていきたい。
- (確認) そのようなルールも分かるようになっているのか。
- (回答) お問い合わせ先を用意し、当面は事務局が受け付ける。
- (確認) 新規の参加自治体については、事務局がその受け入れ窓口になって判断するのか。
- (回答) 申し込みから承認までのフィルター機能と、受け入れ先の準備が整っているか等全般的な調整事もあるので、まず相談に応じる形でスタートしたい。
- (意見) ポータルサイトの運用に関しては、事務局と主催者の国交省で一度協議することが必要。

## 【議題2】 報告書案について

- (意見) 報告書について意見を率直に出してほしい。
- (意見) ボランティアホリデーの定義について、都市部の住民が地方に長期滞在という表現はぼやけてしまう。農山漁村地域だけではないが、農作業や、農村地域の体験がメインになるので、それを表現した方がよい。
- (質問) 地方としたのは特別な意図があるのか。
- (回答) 農山漁村が今後も中心的になることに異論ない。ただそれ以外の部分もあることから、地方というあいまいな表現になり、その分ぼやけてしまっている。
- (意見) そこは文章上工夫すべき。
- (意見) ボランティアメニューを出す以前に、ボランティアを受け入れる地域の魅力をもっと売るべき。都会の人たちにボランティアとして地域に入ってもらう仕組みと、受け入れる方の仕組みも考える必要がある。
- (意見) 地域からの情報発信の仕組みをきちんとつくり、課題としてまとめる必要がある。
- (回答) 地域魅力を発見することは、ボランティアメニューの開拓と同じ作業である。ボランティアホリデー事業は、情報発信の促進にもつながっていく。
- (質問) 情報の創造と、それに対する支援が必要であるという趣旨か。
- (意見) 「高知は他地域とは違う魅力がある」という売り方が必要。
- (意見) 地域の固有性、オンリーワンというものを作ることが課題。一般的な評価、モデル事業、それぞれの地域の評価について、各地域から意見いただきたい。
- (質問) 分類図で、ワーキングホリデー・ボランティアホリデー・体験観光と分けているが、小さな自治体の場合、窓口が同じところになってしまう可能性がある。そういった場合はどのように対応すべきか。
- (回答) 人を分けるよりも、メニュー別に分かれていくものではないか。有償のメニュー、無償のメニューというふうに、実施する中でメニューが分かれていくと認識している。
- (質問) 有償・無償は相当微妙なラインになってくる。自治体で雇用を考える立場では、どう線引きをするべきか。
- (回答) 雇用は地域の中でつくるもの、ボランティアホリデーで訪れる人が奪うようなことのないように考えている。
- (質問) 体験観光の場合、受け入れ側が指導し、体験者は楽しみお金を落とす。そこに雇用が生まれるという考え方である。
- (回答) ワーキングホリデー、体験観光との違いと共通の要素というところで、対価の有無とプログラムと書いてあるが、窓口が一緒になると確かに紛らわしい。今後詰めていく中で、有償・無償のメニュー、ボランティアであれば成立するメニュー等の線引きができてくる。
- (質問) ボランティアホリデーに期待感を与え、新しいホストとゲストの関係を構築する為のきっかけとなるキャッチコピーに関する事務局の考えはどうか。
- (回答) ボランティアの方はお客様扱いを望まず、「ちょっと遠い親戚の関係」的なものを望んでいる。「遠くに住んでいる親戚」「たまに来てくれる親戚」いわゆる「家族の延長線上みたいな形でお互いに気楽にやり取りができるような関係」。それが第二のふるさとづくりボランティアホリデーのコンセプトである。交流のきっかけづくりにボランティアホリデーが役立つようアピールしたい。

- (質問) 受け入れ側から見た「ちょっと遠い親戚づくり、ふるさとづくり」というキャッチコピーはどうか。
- (意見) ボランティアホリデーは、私たちが目標とする交流、半定住を勧めるには非常にいいシステムで期待も持てる。少し遠い親戚というイメージは広げやすい言葉である。
- (意見) 一人でも二人でも定住してくれることを、地域は望んでいる。そのきっかけになることが本当に理想であり望ましい。
- (意見) 遠い親戚は適している。都会で生活し、地方に田舎を持たない人たちに、私たち農山村に暮らす人間がふるさとを贈る人というイメージはとても大事。リゾートを造語で「里贈人」と表現できるように、ボランティアホリデーの位置づけも近いイメージである。
- (意見) 遠い親戚というのはまさにぴったりだと思う。遠い親戚、近くはなく遠くもなく、また自分たちのこと、町のことを知ってもらい、次の機会も来てもらえるかなという感覚、このような関係を双方で築いていきたい。
- (意見) 少し遠い親戚づくりというのが一つのキーワードになりそうである。高知県の地域の方がイメージしているボランティアホリデーの位置づけが、単なる交流に終わらず定住まで視野に入れていることから「少し遠い親戚」というのは非常に良い言葉。その言葉をつかい、ボランティアホリデーを表現してほしい。
- (意見) ボランティアを受けるにあたり、どういう受け方が一番望ましいのか、効果があるのか、留意点、注意点、心掛け等ノウハウを報告書に盛り込み、自治体の参考になるようにしてほしい。例えば今回日替わりのボランティアメニューにしたが、最終的には、一つのことにこだわった方が、地元の人とも交流ができ、達成感があつたのではないかと反省した。そのようなことを参考にしてほしい。
- (回答) 報告書とポータルの中にも入れたい。
- (意見) モデル事業をやる意義は、成功も大切だが失敗経験も大切で、これに追随される方々に、ここがクリアだともっと進むというところを明確にする必要がある。もう一つは、この報告書の基調が盛りだくさんになり、実施するのが大変という印象。実施すると地域にも、ボランティアの方にもメリットがあることをクローズアップしたい。

### 【議題3】平成17年度のボランティアホリデーについて

- (質問) 17年度の動きについては、既に事務局は確認しているのか。
- (回答) 16年度にモデル事業を行った北海道・東北・四国・九州4地域の自治体は非常に熱心で、できるだけ4地域合同で続けられる方法を今模索している。また他の自治体からも参加の申し出があり今後検討していく。ポータルの検討事項も含め、3月、4月の間に詰めたい。
- (意見) 17年度も継続して事業を進められるということについて、高知県の方から発言いただきたい。
- (意見) 地元の方が非常に熱心だと聞いているが、私個人としては受け入れ側の体制づくりが非常に厳しいと思っている。皆さん方の努力を期待し、17年度事業については、国の方に尽力いただきたい。
- (意見) 事業を1年間統括された国土交通省の方にまとめていただきたい。
- (意見) 地元の自治体の方が非常に積極的で具体化したいという発言があつた。ぜひ実現させ、他の地域で注目している自治体も参加できるよう、国土交通省としても何らかの形で支援をしていき

たい。軌道に乗るまでは地元の皆さんのやる気と熱意が決め手になるので、ぜひ継続的に取り組んでほしい。

以 上